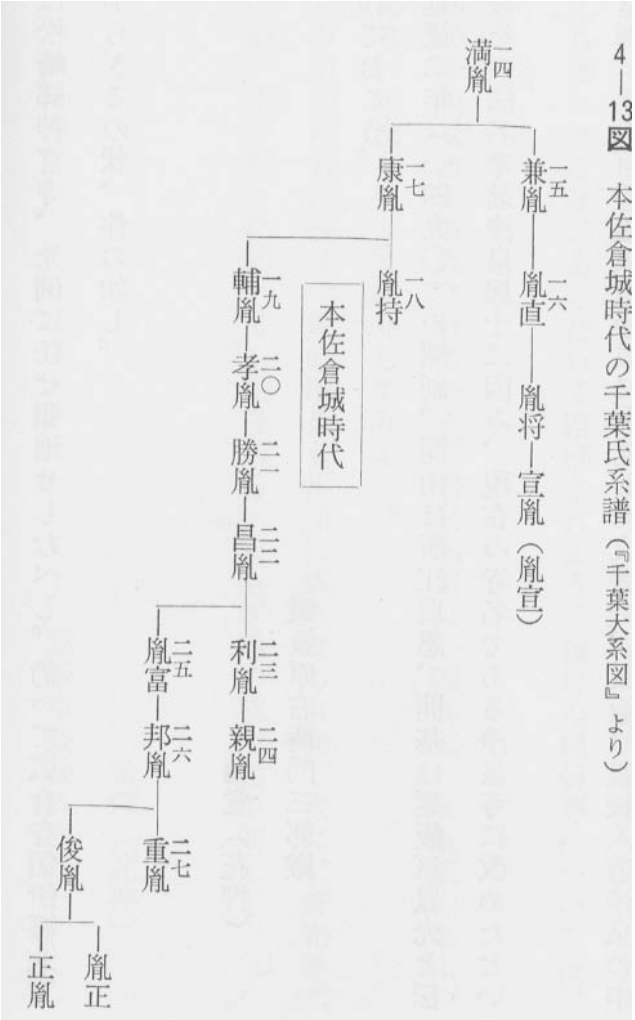
二　本佐倉城時代の千葉氏

輔胤・孝胤　本佐倉城に本拠を移して以降の千葉氏は次第に衰勢に向かい昔日の面影を失っていった。『千葉大系図』によれば、輔胤の没したのは、延徳四年（一四九二）壬子二月十五日で七二歳であった。孝胤が家督を相続し、一三年余りの間、その地位にあった。のち、孝胤は永正二年（一五〇五）乙丑八月十九日六三歳にて卒している。

十五世紀に入ると、古河・堀越の両公方および両上杉氏は互いの争いにつかれ、衰退していったのに対して、これにかわる新しい勢力の台頭のみられたことは、周知のところであろう。すなわち、小田原城を拠点とする後北條氏の東方への進出、また、安房一国を平定した上総・下総をねらう里見氏、上総の庁南・真里谷の武田氏、土気・東金の酒井氏、千葉氏にかわって頭角をあらわした原氏（千葉介満胤の子胤高を祖とする）など新勢力との交替がクローズアップされた時代である。こうした状勢の中で、房総の弱小の豪族は、里見氏か後北條氏のいずれかに属しながら詩第四代に後北條氏の力の前に屈していったことはよく知られていたところである。その画期となった争いこそ、天文七年（一五三八）の第一次の国府台の戦いであり、さらに、永禄六年（一五六四）の第二次の国府台の戦いであったことは、今さら贅言をようしないところであろう。



4―13図　本佐倉城時代の千葉氏系譜（『千葉大系図』より）